

トマス・アクィナス『形而上学註解』における ordo と potentia

古 舘 恵 介

1 はじめに

トマス・アクィナスの形而上学の根幹をなす諸概念の中に、actus-potentia という対概念がある。この対概念はアリストテレスが『形而上学』の第9巻で主題的に論じた *ἐνέργεια-δύναμις* のラテン訳であり、日本語では通常は「現実態」-「可能態」と訳されている。しかしこれらの語が第一義的に「現実」「可能」という様相を区別していると考えると、以下で述べるような難点が生じる。そこで本稿では、トマスの『形而上学註解』に依拠して、トマスにおいてはこれらの語が根本的には様相ではなくある種の順序を区別しており、様相の区別は二次的な区別であるという解釈を提示する。そのことにより、トマスの esse 概念の研究に新たな視点を提供することができるだろう。

トマス・アクィナスの思想が esse と essentia を中心に展開されているのは周知の事柄であり、トマス研究においてはその esse の意味を解き明かすことが一つの大きな目標とされている。トマスは多くの箇所では、esse あるいは ens の意味分類を提示しているが、その中の一つにおいて、esse は第一の意味では「esse の actus」(actus essendi) を表すと述べている¹⁾。したがって、トマスにおける esse の意味を理解するためには、actus の意味を理解することが前提となる。にもかかわらず、これまでの研究では、actus は esse を説明するための道具としては使われても、actus 自体の根本的な意味がトマスのテキストに即して説明されるということはほとんどなかった。actus-potentia は従来「現実

1) *Summa Theologiae*, I, q. 3, a. 4, ad 2.

態」[可能態]という様相(modality²⁾)を区別する語で訳されてきており、このことは特に問題視されることなく前提として受け入れられてきた。かつて強い影響力を持っていたジルソンの「存在の現実態(l'acte d'exister)」説も、近年の分析的トミストの議論も、この点においては変わらない³⁾。しかし、esse が essentia に対して、actus が potentia に対するのと同じ関係にある⁴⁾ことを考えると、このような前提には問題が生じてくる。すなわち、可能という様相のもとにあるものは、現実にあるか否かとは独立に、とにかく可能なものとして成立していると考えられるが、トマスの essentia についてそのようなことが言えるかどうかは疑わしい。実際に山田晶は、「絶対的に考察されたエッセンチアは存在に対しては全くの可能性であって、それ自体としてはどこにも存在しない」として、essentia が単独で何ものかとして成立していることを否定している⁵⁾。しかし、「全くの可能性」が何を意味するのかということは十分には説明されていない。

この難点は、「創造(creatio)」をも考慮するとさらに明確になる。トマスの言う「創造」は、予め存在している可能性の現実化を意味しているのではなく、esse している被造物が、esse するために神に依存しているというその関係そのものを意味している⁶⁾。しかし一方で、essentia が esse に対して「可能態にある」と考えられてきた。ケニーは、そのためトマスが主張したとされる esse と essentia の実在的区別が理解できなくなっているとしてトマスを批判しているが⁷⁾、理解できなくなっているのは実は「現実態」と「可能態」の区別であるとも考えられる。

以上のことは、actus-potentia の区別が、少なくとも esse-essentia の区別に重ねられる場合は、「現実」「可能」という様相の区別ではないと

2) 本稿では様相という語を「潜在」「実現」または「可能」「現実」の区別という意味で用いる。

3) 例えば Kenny [2002] p. 46 の引用では、esse はラテン語のまま表記されているのに対して、actus は actuality と訳されている。

4) *Summa Theologiae*, I, q. 54, a. 3, c.; *ibid.*, I, q. 79, a. 1, c.; *De Ente.*, C. 4.

5) 山田 [1978] p. 405.

6) *Summa Theologiae*, I, q. 45, a. 3, c.

7) Kenny [2002] pp. 45-46.

いうことを示しているのではないだろうか⁸⁾。

2 様相的解釈の典拠

ではなぜ actus-potentia はなぜこれまで「現実態」-「可能態」と訳されてきたのだろうか。それは、このラテン語に訳されたアリストテレスの *ἐνέργεια-δύναμις* が一般に様相の区別とみなされていることと、トマスにおいても actus-potentia の用例の多くはこれと同義であると考えて特に問題が生じないことによると思われる。

アリストテレスは *ἐνέργεια-δύναμις* の対概念を『形而上学』9巻で主題的に論じている。そして現代のアリストテレス研究者たちはまず基本的な前提として、9巻全体の構成を以下のように理解している。アリストテレスは1章で、*δύναμις* に二つの意味があることと、その二つの意味に応じて9巻を二つに大別することを述べている。第一の *δύναμις* は、運動と言う意味での *ἐνέργεια* と対比される、形而上学において最有用ではない *δύναμις* であり、これは1-5章で語られる。第二の *δύναμις* は、運動以外の *ἐνέργεια* と対比される、形而上学において最有用な *δύναμις* であり、これは6-9章で語られる。10章は *ἐνέργεια-δύναμις* とは関係のない、真理についての論文である。以上がロス以降現在までの主流をなす解釈である⁹⁾。ロスは第一の *δύναμις* には様相性を認めずこれを「能力 (power)」と訳し、第二の *δύναμις* だけを様相概念である「可能態 (potentiality)」と解釈した¹⁰⁾。近年は第一の *δύναμις* にも様相性を認める見解が出てきているため、「能力」と「可能態」という区別は揺らいできているが¹¹⁾、いずれにせよ第二の *δύναμις* とそれに対比される *ἐνέργεια* をめぐる議論が展開される6-9章が、中でも様相性が本格的に規定される6章が、9巻の中でも特に議論の対象となっている。そこではアリストテレスは、*ἐνέργεια* の定義を求めることはできず、ただ以下

8) 上枝 [2006] は様相の区別として actus を理解し、「エッセとは、この世界が可能世界ではなく現実世界であるという意味における現実性である」としているが、*essentia* の単独での身分は明確にしていない。

9) Ross [1924], Frede [1994], 茶谷 [2004], Makin [2006], Beere [2009] など。

10) そのうえでロスは、3章では power にも potentiality が混入しているとしてアリストテレスを批判している (Ross [1924] pp. 239-246)。

11) Frede [1994], 茶谷 [2004], Makin [2006], Beere [2009] など。

のような類比関係を見ることで満足すべきだとしている。

ἐνέργεια とは、事物が *δύναμις* においてと我々が言うような仕方ではなく存在することである。我々が *δύναμις* においてと言うのは、例えば木材の中のヘルメス像や、全体の中の半分や……、思弁することができるが思弁してはいない知者などである。これに対してヘルメス像や半分や思弁している知者は *ἐνέργεια* においてある。(1048a30-35)

建築しているものが建築しうるものに対して、目覚めているものが眠っているものに対して、見ているものが視力を持っていないが目をつぶっているものに対して、素材から切り取られたものが素材に対して、完成したものが完成していないものに対して、という対立項のうち、一方が *ἐνέργεια* と定められ、もう一方が「できるもの」と定められる。(1048a35-1048b6)

またすべての *ἐνέργεια* が同じ意味で *ἐνέργεια* と言われるのではなく……、ある類比関係は運動が *δύναμις* に対するようにあり、またある類比関係は実体が素材に対するようにある。(1048b6-9)

これらの類比項において、一方の *δύναμις* はみな「何かができる」や「何かになり得る」というあり方をしている。アリストテレスは「様相」にあたる言葉を用いてはいないが、このようなあり方は現代では確かに「様相」と呼ばれている。そしてこれがアリストテレスの言う「最有用な *δύναμις*」の意味だとすれば、確かに *δύναμις* は様相概念とみなすことができるし、それと対になる *ἐνέργεια* もまた様相概念だということになる。つまりこれらの類比項のすべては、可能態と現実態という様相の対比の事例とみなされる。ただしアリストテレスによる様相の区別は、現実世界と可能世界との区別ではない。あえてこの用語を用いるなら、アリストテレスは現実世界の中での生成変化における、潜在的なものと実現したものとの区別を論じている。したがってこの様相の対比は、潜在状態から実現状態への、時間上の移行を伴う。実際続く 7 章では、

「各々のものはいつ *δύναμις* においてあり、いつそうではないのか」(1048b37) という、様相と時間の関係が論じられる¹²⁾。

以上が、現代のアリストテレス研究者たちに従った *ἐνέργεια-δύναμις* の基本的な理解である。このような様相の区別をトマスの actus-potentia に当てはめ、esse を「存在」と訳したのが、ジルソンの「存在の現実態」説であると言えるだろう。すなわちジルソンは、essentia が存在そのものに対してははまだ可能態 (en puissance) にあるということ を明らかにしたトマスの独創性を評価しているのである¹³⁾。ただしジルソンも、essentia が「可能なもの」として、例えば可能世界や存在以前の世界に、予め存在するとは言っていない。むしろジルソンが強調しているのは、essentia が神から esse を受け取らずに単独で存在することができないという点である。しかしそうであるなら、この場合の essentia が「可能態にある」ということと、生成変化において潜在状態にあるものが「可能態にある」ということとは、そのあり方は相当異なっている。にもかかわらずなぜ同じ「可能態にある」という言葉を用いることができるのかを、ジルソンは説明していないのである。その後も現在に至るまで、actus と potentia が本当に「現実態」と「可能態」を意味するのか否かということが改めて問われることはなかった。

しかし、トマスの『形而上学註解』9巻を読むと、トマスにおける actus-potentia を無条件に「現実態」と「可能態」の区別として理解することには問題があるということがわかる。トマスが註解で示している『形而上学』9巻全体の構成は、1-9章で第一の potentia が論じられ、10章で第二の potentia が論じられるというものである。このうち第一の potentia は運動そのものではなく運動する事物にかかわり、第二の

12) ただし、質料を重点的に論じる8巻においては、「一方は素材でもう一方は形相であり、そして一方は *δύναμις* においてありもう一方は *ἐνέργεια* においてあるなら」(1045a23-24) という発言があり、*ἐνέργεια-δύναμις* は質料形相論と組み合わせられている。そしてもし質料形相論が、事物の生成という通時的視点ではなく、ある時点での事物の構成という共時的視点に立つのならば、*ἐνέργεια-δύναμις* についても通時的視点からだけでなく共時的視点からも論じなければならない。この二つの視点をいかにして統合するかということはアリストテレス研究においても問題とされている。この点についてはいずれ稿を改めて論じる。

13) Gilson [1972] pp. 108-109.

potentia は運動しない事物すなわち分離実体にかかわるとされる。しかも、この分離実体を論じることこそが9巻の主目的だとトマスは考えている¹⁴⁾。このように、様相概念の典拠となっている『形而上学』9巻に対する根本的な立場が、トマスと現代の多くのアリストテレス研究者たちとで全く異なる。したがって、彼らが読み取った現実態と可能態という区別をトマスが論じているという保証はどこにもないのである。我々は以下において、『形而上学註解』9巻に基づき、actus-potentia が何を区別する語であるかを検討しよう。

3 principium としての potentia

トマスもアリストテレスと同じく、「様相」にあたる言葉を用いていない。アリストテレスは9巻1章で、「*ὅν* は一方では、何であるか、どのようなものであるか、どれだけであるか、といった点から言われ、他方では *δύναμις* とエンテレケイアすなわち働きに従って言われる」(1045b32-35) と述べているだけである。この箇所に対する註解においてトマスは、前者の区別を総括して「十のカテゴリー (praedicamenta) に従った」と表現しているのに対して、actus と potentia に従った分け方にはそのような総括する表現を与えていないのである (*In Met.*, 9, 1, 2, 1769, 1045b32-35)¹⁵⁾。本節ではこの対概念が何を区別しているのかを明らかにするために、様相性を前提とせず actus-potentia の基本的な規定をトマスの註解に従って確認する。

トマスの註解によれば、アリストテレスははじめに potentia を規定するが、それは9巻1章の1カ所においてだけである¹⁶⁾。

一つの種へと還元される potentia について、以下のことが考察されなければならない。すなわち諸々の potentia はそれぞれが principium であり、principium と呼ばれるすべての potentia はさらに

14) テキストの分析は古館 [2011] でなされている。

15) ens の区別に言及した他の箇所においても同様である。 *In Met.*, 5, 14, 1, 954, 1019a15; *ibid.*, 6, 2, 1, 1171, 1026a33-b2; *ibid.*, 10, 1, 1, 1920, 1052a15などを参照。

16) トマスはアリストテレスのテキストの各箇所が何を規定しているかを必ず明言するが、「アリストテレスは potentia そのものを規定している」 (*In Met.*, 9, 1, 6, 1773, 1045b34) と述べている箇所は本当に1カ所だけで、その範囲は9巻1章だけを指している。

或る principium に還元され、これに基づいて principium と呼ばれる。そしてそれは能動の principium であり、他である限りの他のうちにある転化の principium である。(In Met., 9, 1, 9, 1776, 1046a9-11)

これはアリストテレスのテキストをほぼそのままなぞったもので、potentia が何らかの意味での principium であることと、能動の principium が他の(受動などの) principium に優越していることがここで表明された。能動の principium とは、とりあえずは「働きかける能力」と考えておいてよい。principium には従来、「原理」「始原」「根源」などの訳語が当てられてきたが¹⁷⁾、我々は principium の意味についても検討するのでここでは訳さずにおく。ここではまだ potentia そのものについて様相性を示すような発言はなされていないことに注目しておきたい。

次に我々にとって重要な発言が現れるのは、3章のメガラ派駁論の箇所に対する註解である。ここで in potentia というあり方と、in actu というあり方が規定される。

in potentia にあるとはいかなることかということ、actu においてあると仮定しても不都合が生じないものが、in potentia にあると言われる。例えばもしある人が座ったと仮定しても不都合が起らないなら、その人が座ることはあり得ること (possibile) である。(In Met., 9, 3, 10, 1804, 1047a24-26)

ここで in potentia は「あり得ること (possibile)」と言い換えられて様相性を帯びているが、これは potentia そのものの規定ではなく、in potentia の規定であるという点に注意しなければならない。ここでは potentia 自体の規定すなわち「運動の principium」と、「あり得ること (possibile)」との関連は明らかにされていない。

17) 山田 [1955] は、『形而上学』5巻12章に対するトマスの註解に基づき、能動と受動の原理(もと)、すなわち「能力」としての potentia と、「可能態」としての potentia がいかんして結び付くかを論じている。

これに続いて対概念のもう一方である *actus* が規定される。

次に, *in actu* にあるとはいかなることかを明らかにして, アリストテレスは以下のように言う。——この *actus* という名は, エンテレケイアあるいは完全性を, つまり形相やその他そのようなものを指すために置かれる。それらは皆働きであり, 主としてその語源である運動に由来する。……*actus* という名はまず運動に対して与えられ, そこから他へと広がるのである。(In Met., 9, 3, 11, 1805, 1047a30-32)

ここでトマスは「*in actu* にあること」を取り上げながら, 実際には *actus* そのものを説明している。ここでは, *actus* は基本的には運動を指すが他のものすなわち完全性や形相にも適用されるということが示された。しかしここでも, *actus* そのものについて様相性を示すような発言はなされていない。

この後の4章と5章では, *actus-potentia* そのものではなく, それを担う基体が論じられる。そして6章に至ってトマスは言う。

ここまで可動的事物における *potentia* について述べられた。それは能動的あるいは受動的な運動の *principium* であった。ここからは *actus* とは何か, そして *potentia* とどのように関係するかを規定しなければならない。(In Met., 9, 5, 1, 1823, 1048a25-27)

つまりトマスによれば, 5章までで *potentia* そのものの規定は終わっているのである。先に確認した現代のアリストテレス研究に従うなら, 運動を意味する *actus* とそれ以外のものを指す *actus* が区別され, *potentia* もそれに応じて区別されるはずである。しかしトマスはそのような区別をせず, ここで *potentia* の意味が変わるとは考えていないのである。そして *potentia* とはやはり「運動の *principium*」ですべてであり, ここから9章まで, その意味は変わらないというのである。

これに続いてトマスは, 前節で見たアリストテレスのテキストにおける類比の諸例から, *in actu* というあり方の意味を汲み取るように要求

するが、*potentia* が新たな意味を得るとは述べない。トマスは *actus* について次のように言う。

アリストテレスは *actus* とは何かを示して次のように言う。——
actus とは、事物があるときに、*in potentia* にあるときのようにしてではなくあることである。例えば木が削られる前は、木の中にメルクリウス像が *actus* においてではなく *potentia* にある。……同様に思弁していない知者は、考えていないときでも考えることができるものではある。この場合も思弁することや考えることは、*in actu* にあることである。(In *Met.*, 9, 5, 3, 1825, 1048a30-35)

ここでトマスは、*actus* を取り上げながら実際には *in actu* というあり方について説明する。そしてトマスはアリストテレスに従い、*in actu* を積極的に定義せず、ただ類比の諸例を示すだけである。しかし *in actu* が、様相性を帯びた *in potentia* の反対であるからには、これにも様相性が認められるだろう。

続いてこのように類比を用いることについての説明がなされるが (In *Met.*, 9, 5, 4-9, 1826-1831, 1048a35-1048b17), *actus* あるいは *in actu* の規定がこれ以上追加されることはない¹⁸⁾。そして7章冒頭に対する註解でトマスは、「アリストテレスは *actus* とは何かを明らかにした後……」(In *Met.*, 9, 6, 1, 1832, 1048b37) と述べて、ここまでに可動的事物の領域における *actus* の規定も一通り出そろったとしている。

ここまでに明らかになったことを一度整理しよう。*actus* とは「運動」、「完全性」、「形相」であり、*potentia* とは「運動の principium」あるいは *actus* の principium であった。「*in potentia*」は、ここまでの範囲では、「あり得る」と言い換えられており、「*in actu*」とは *in potentia* にあることの反対で、それは類比の諸例から汲み取られるものであった。

しかしこれだけではまだ、*actus-potentia* そのものが何を区別してい

18) トマスが用いた『形而上学』のテキストには6章後半1048b18-35は欠落していたと思われる。

るのかということと、なぜ in actu と in potentia というあり方が様相性を帯びるのかということが明らかになっていない。これらの点を明らかにするため、potentia が運動（あるいは actus）の principium と言い換えられていたことに注目しよう。トマスはこの後も、potentia が principium であることを確認しながら註解を進めている¹⁹⁾。したがって principium の含意を明らかにすることが、この問題を解決することにつながるだろう。

4 principium と ordo

トマスはアリストテレス『形而上学』5巻1章に対する註解において、principium を論じている。アリストテレスは様々な ἀρχή を列挙した後、それらを「第一のもの (τὸ πρῶτον)」として総括している (1013a18)。トマスはこのテキストを検討する前に、「principium はある種の ordo を含意する」(*In Met.*, 5, 1, 3, 751, 1012b34) という、アリストテレスのテキストにはない表現を用いて、自身の見解を明確にしている。ここで principium は ordo と言い換えられたが、ordo も非常に含蓄の深い言葉である。したがってここでは principium とともに ordo についても検討していく。

トマスはこの直後に、「先後 (prior et posterior) の ordo というものは様々なものにおいて見出される」(*ibid.*, 5, 1, 3, 751, 1012b34) と述べている。また5巻11章に対する註解においてもトマスは、「アリストテレスはここで ordo を指す語すなわち先後 (prior et posterior) を分類する」(*In Met.*, 5, 13, 1, 936, 1018b9) と述べている。つまりトマスによると、ordo とは先後という言葉で示されるものである。そして先後という言葉で区別されているものは、日本語では「順序」である。そして順序 (ordo) と principium との関係は、この11章に対する註解に最も明瞭に記されている。

アリストテレスは言う。——「先」の意味は principium の意味に依存する。各類における principium とは、その類の中で第一のもの

19) *In Met.*, 9, 6, 6-7, 1837-1838, 1049a3-18; *ibid.*, 9, 7, 1-2, 1844-1845, 1049b4-12.

のである。そして「先」と言われるのは、何らかの特定の principium により近いものである。——このような principium とそれに近いものとの順序 (ordo) は、様々な点から考察できる。(In Met., 5, 13, 1, 936, 1018b9-12)

次に、アリストテレスは何かが先あるいは後と言われる様々な意味を区別する。先後は何らかの principium への順序 (ordo) に関連して言われ、そして principium は先述の通り²⁰⁾ esse における第一のものであるか、生成における第一のものであるか、認識における第一のものである。(In Met., 5, 13, 2, 937, 1018b9-12)

ここではまず順序 (ordo) において principium により近いものが「先」であることが明らかにされた。続いて principium とは順序における第一のものであることも明らかにされた。したがって principium とは順序における第一点、すなわち順序を構成するための「始点」であると考えることができる²¹⁾。

5 順序の区別としての actus-potentia

前節で明らかになった principium の含意を踏まえながら、actus と potentia が何を区別しているかを考えてみよう。すると始点 (principium) と呼ばれた potentia は、運動を含めた様々な actus に向かう、第一点という順序を指していることになる。そして実際に『デ・アニマ註解』には、「potentia は actus へのある種の順序 (ordo) に他ならな

20) 5巻1章に対する註解の結論部分 (In Met., 5, 1, 13, 761, 1013a17-19)。

21) 5巻1章と11章に対する註解で検討されている順序 (ordo) の分類は以下の三通り。一、esse することに関する順序。これはさらに三つに分かれる。すなわち、依存に伴う先後関係 (In Met., 5, 1, 14, 762, 1013a21; *ibid.*, 5, 13, 15, 950, 1019a2-4) と、実体と付帯性との間の先後関係 (*ibid.*, 5, 13, 16, 951, 1019a4-6) と、ens が actus と potentia に分かれることによる先後関係 (*ibid.*, 5, 13, 17, 952, 1019a6-11)。二、運動や生成における、場所や時間の上での先後関係 (*ibid.*, 5, 1, 3-10, 751-758, 1012b34-1013a14; *ibid.*, 5, 13, 2-10, 937-945, 1018b12-29)。三、認識における、先に知られるものと後に知られるものとの先後関係 (*ibid.*, 5, 1, 11, 759, 1013a14-16; *ibid.*, 5, 13, 11-14, 946-949, 1018b29-1019a1)。このそれぞれに基準となる第一点 (principium) がある。ただし、トマスは先後の例はすべて esse における依存に伴う先後関係に還元されることができると考えている (*ibid.*, 5, 13, 18, 953, 1019a11-14)。

い」(*In de Anima*, 2, 11, 9, 366, 417b2-5) / (L. 2, C. 11, p. 112, ll. 121-122) という表現がある。以上のことから, actus-potentia は順序の区別である, という仮説が成り立つ。すなわち actus-potentia は, 根本的には「現実」「可能」という様相ではなく, 何らかの順序を区別している, という仮説である。ただ当然ながら, 順序を構成するすべてのものが actus-potentia であるわけではない。順序をなす様々なものどものうち, 特に actus-potentia として区別されるのは, 形相と質料, esse と essentia などの, 事物の形而上学的な諸要素と, 運動の前後に現れる潜在者と実現者である。すなわち, 何らかの意味で, 一つの事物の構成に関わるものどもである²²⁾。この仮説に従って, actus-potentia の区別が, まず可動的事物の生成変化において, 次に分離実体において, 最後に esse-essentia に重ねられた場合において, それぞれいかなるかたちで見出されるかを考えてみよう。

生成変化する可動的事物すなわち質料的事物の領域には, 運動や実体などの様々な actus が見出される。しかし, これらの actus は純粹に actus だけで成り立っているのではない。これらは必ず, 時間的に先立つものの後に構成されなければならない。この先立つものが potentia と呼ばれる²³⁾。またこの先立つ順序を占めるというあり方が in potentia と呼ばれ, その後の順序を占めるというあり方が in actu と呼ばれる。このように, actus-potentia という順序の区別が, たまたま生成変化においては時間上に構成されるために, 様相の区別をも生み出すのである²⁴⁾。

では, 時間上に構成されない actus すなわち分離実体の actus は, いかにして構成されるのだろうか。まず, 「叡知的事物のような不可動的事物(分離実体)のうちにも, actus-potentia が見出される」(*In Met.*,

22) 本稿6節で少しだけ論じる通り, これらのいずれの順序においても, 完全性の程度差が見出される。そしてこれが actus と potentia を分ける基準であると思われる。しかしこれらの語の意味の厳密な解明は, 今後の課題とする。

23) この先後関係について, 時間的には potentia が先立つが定義や実体においては actus が先立つことが, 9巻8章で論じられている。

24) トマスの自然学において, in potentia にあるものとして第一質料が極めて重要な役割を担っている。これを説明するにも順序の区別という解釈は有効であると思われるが, これについてはいずれ稿を改めて論じる。

9, 1, 3, 1770, 1046a1-2) と言われているので、分離実体においても actus-potentia の区別があることは確かである。しかし「すべての単純実体（分離実体）は、actus において ens であり、決して potentia に ens であることはない」(*In Met.*, 9, 11, 17, 1911, 1051b28) と言われているので、分離実体の actus-potentia については in actu から in potentia へという二つの様相間の転換を伴った理解は成り立たない。ところが分離実体における actus-potentia が主題であるとされる 9 巻 10 章に対する註解においては、トマスは実際には分離実体を認識する際の真偽の条件を論じ、actus-potentia の区別についてはほとんど説明していない²⁵⁾。分離実体において見出される actus と potentia の混淆については、『ens と essentia について』の 4 章が詳しい。トマスは言う。

何かを他のものから受け取っているものはすべて、その受け取られているものに対して in potentia にあり、そのものによって受け取られているものはそのものの actus である。したがって、叡智体である形相あるいは何性は、それが神から受け取っている esse に関しては in potentia にあり、またその受け取られている esse は actus として受け取られていなければならない。このように、叡智体においても actus と potentia が見出されるが……。 (*De Ente.*, C. 4, p. 377, ll. 147-153)

ここでは確かに、分離実体である形相が、actus である esse に関して in potentia にあると言われている。しかし分離実体は様相転換を受け入れないので、これが esse する以前に潜在的に esse していたと考えることはできない。そこで、この場合の actus-potentia を順序の区別として説明してみよう。すなわち、分離実体の内部構造は、下位の順序にあるものすなわち potentia 部分と、上位の順序にあるものすなわち actus 部分との重層構造である。そしてこの場合、potentia（形相）が actus（esse）を得るまで単独で待機しているというようなことはない。potentia は actus とともに一つの事物を構成している限りでのみ potentia

25) テキストの分析は古館 [2011] でなされている。

であるし、actus も potentia とともに一つの事物を構成している限りでのみ actus である。つまり両者は同時的、正確には無時間的である。かくして分離実体においても、質料的物におけるのと同じく、potentia から actus へという順序の中にも両者が成立するのである。ところで、最も単純だとされる神の内部構造は、actus のみの単層構造 (actus purus) である。ということは、actus だけは順序に還元されない固有の性格を持っているということである。これについては最終節で検討する。

最後に、esse と essentia の区別に重ねられた actus と potentia の関係はどうか。この場合も分離実体の場合と同じく、actus-potentia を順序の区別として理解すれば、「現実」「可能」という様相概念を用いることなく説明することができる。つまり esse がある限り必ずそれと順序をなす essentia がなければならない。この場合も、potentia から actus まで、という一つの順序の中に esse が成り立っているのである。かくして、「essentia と呼ばれるのは、それによって、そこにおいて、ens が esse を持つところのものである」(De Ente., C. 1, p. 370, ll. 50-52) という essentia の規定を説明するうえで、esse への「可能態」という様相概念を用いる必然性はなくなるであろう。

6 完全性の順序としての actus-potentia

では以上のような様々な actus-potentia に共通している性格は何か。potentia のほうは actus への順序と規定されていたのであるから、この点を明らかにするためには、actus の固有の性格を示す必要がある。そのために、esse が持つ actus という性格すなわち actualitas を、順序の区別として説明してみよう。トマスは言う。

esse そのものは、あらゆる事物の actualitas であり、もろもろの形相の actualitas ですらある。(Summa Theologiae, I, q. 4, a. 1, ad 3.)

esse は形相に対して actualitas を持っている。しかし、形相も質料に対しては actus である²⁶⁾。つまり形相も actualitas を持っていると考えら

26) De Ente., C. 2, ll. 31-32.

れる。この actualitas が従来「現実性」と考えられてきたのだが、我々の解釈によって、従来の解釈に付きまとう現実性の二重化²⁷⁾という奇妙な事態を避けることができる。つまりこの一節は、様々な actus が何らかの程度差に従って並びながら一つの事物を構成するということを表していると考えることができる。それが何の程度差であるかについて、再び『形而上学註解』を見てみよう。先に引用した箇所の一つで、「actus という名はエンテレケイアあるいは完全性を、つまり形相やその他そのようなものを指すために置かれる」(*In Met.*, 9, 3, 11, 1805, 1047a30-32)とされていた。すなわち事物の形而上学的な諸要素のうちで、完全性のより強い側にあるという性格が、actus という性格すなわち actualitas であると考えられる。そしてその性格を最も強く持っているものが esse であるとトマスは言っているのである。また神は複数の要素でできているわけではないので、神においては一つの完全性があるだけである。さてその esse は「存在」であるか否かがトマス研究における大きな問題なのであるが、仮に「存在」だとしても、そのことの根拠を esse の actualitas に求めることはできない。なぜなら、完全性が強いことと、「存在」とは同義ではないからである。

かくしてここまでの議論によって、今の引用箇所をはじめとした、いわゆる「存在の現実態」をトマスが論じていると考えられる多くの箇所について、改めて検討しなおすための視点が与えられたのである。

引用文献

トマスのアリストテレス註解書からの引用は、(書名, 巻, 講, 節, マリエッチ版節番号, 註解箇所ベッカー版頁数)で記した。ただし註解の講とアリストテレスのテキストの章は必ずしも一致しない。トマスのその他の著作については慣例に従った。

Beere, J. [2009] *Doing and Being: an interpretation of Aristotle's Metaphysics theta*, Oxford University Press.

Frede, M. [1994] 'Aristotle's Notion of Potentiality in Metaphysics Θ' in *Unity, Identity, and Explanation in Aristotle's Metaphysics*, T. Scaltsas, D. Charles, and M. L. Gill (eds.), Oxford University Press, pp. 173-93.

27) 上枝 [2006] が actus あるいは actualitas を、現実態 1 と現実態 2 に分けて論じている。

- Gilson, E. [1972] *L'être et L'essence*, 3e éd., J. Vrin, Paris.
- Kenny, A. [2002] *Aquinas on Being*, Oxford University Press.
- Makin, S. [2006] *Aristotle Metaphysics book Θ: translated with an introduction and commentary*, Oxford University Press.
- Ross, W. D. [1924] *Aristotle's Metaphysics vol. 2*, Oxford University Press.
- 上枝美典 [2006] 「神・存在・現実——トマス・アキナスのエッセ解釈の試み」(関西哲学会『アルケー』第14号, 141-156頁)
- 茶谷直人 [2004] 「アリストテレス『形而上学』Θ巻におけるアナログアと二つのデュナミス」(日本哲学会『哲学』第55号, 218-230頁)
- 古館恵介 [2011] 「トマス・アキナスのポテンチア論——『形而上学註解』第9巻研究」(北海道大学哲学会『哲学』第47号)
- 山田晶 [1955] 「能力と可能態」(大阪市立大学文学会『人文研究』第6巻4号, 70-85頁)
- 山田晶 [1978] 『トマス・アキナスの《エッセ》研究』(創文社)